空間・社会・地理思想 21 号，99-101 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

地球の変貌

アンリ・ルフェーヴル *

（平田 周 ** 訳）

初出：Henri LEFEBVRE, « Quand la ville se perd dans une métamorphose planétaire », *Le Monde diplomatique*, 1 mai 1989.
再掲：Henri LEFEBVRE, « Métamorphose planétaire », in « L'urbanisation du monde », *Manière de voir-Le Monde diplomatique*, N° 114, décembre 2010-janvier 2011.

ここ数十年、都市的なものが、生産的実践と歴史的経験の総体として新たな価値や新しい文明を担うものになるという印象が抱かれてきた。こうした希望は、モダニティをめぐる最後の幻想と同時に消え去る。アポリネールには大切だったモダニズム的な陶酔のようなものが熱っぽく書かかれることは、今ではもうない。

パリの夜はジンに酔い
電光で光が瞬く
路面電車が背に青い火花を散らつかせ
線路の距離だけ歌う
その愛情を機械にむけて[訳注1]

いずれ近代都市の批判は、現代世界の日常生活批判に合流することになるだろう。しかしながら、それを総括するとなると、直ちにいくつかの逆説に遭遇する。第一の逆説は、都市が拡大すればするほど、社会関係がますます壊れていくということに起因する。都市は19世紀末からほとんどの先進諸国で途方もない成長を遂げ、多くの期待をもたらした。だが、実際には都市生活が、まったく新しい社会関係を生み出したというわけではなかったのである。

あたかも古くから存在する都市の拡大と新たな都市の建設が、従属、支配、排除、搾取といった関係からの避難所や隠れ家としての役割を果たすかのように、あらゆる物事が進んでいく。要するに、日常性の枠組みは少しばかり修正されたが、その中身に関していえば、変化はなかったのである。都市生活者の状況は、都市形式の拡大および生産労働の伝統的形式の破壊との関連で深刻なものとなった。都市の拡大は伝統的な労働の破壊とともに進む。新技術の登場によって、新たな生産の組織化のみならずそれに影響を及ぼす新たな都市空間の組織化もまたもたらされる。しかし、それらは互いを改善するというよりも、共に条件を悪化させていくのである。

かつて都市の中心が、能動的で生産的、つまり民衆的だった時代があった。さらに旧市街は、とりわけその中心によって存在していた。この都市形式の解体が19世紀末頃に始まると、人々が能動的で生産的だとみなしたものを徐々に遠い郊外に追いやっていくことになったのである。私たちはこのことで支配階級を責めることができよう。しかし、付け加えなければならないのは、支配階級は都市的なものの傾向と生産諸関係の要請をうまく利用しただけだということである。都市の中心に公害をもたらす工場と産業をとどめておくことは可能だったのだろうか。

しかし、支配者たちにとっての政治的利益ははっきりしている。例えば、都市中心のブルジョワ化、生産の中心地を決定とサーヴィスの中心地に置き換えることなどである。都市中枢は、消費の場となるだけでなく、それ自体が消費の価値をもち始める。

郊外に輸出されるとまでは言わないまでも立ち退きを迫られた生産者たちは、彼らが奪われ、収奪された中心に旅行客として立ち戻る。今日では、周辺に住む人々が、余暇の場所として、何もしなくてよい無為の時間を過ごす場所として都市中枢に再投資するのが見受けられる。それによって、都市現象は根本的に修正される。歴史的中心そのものは消え去った。それでも一方では決定と権力の中心が存続し、他方では人為的で人工的な空間の数々が存続する。都市が存続しているのは確かだが、それは、美術館に展示されるようなスペクタクル的な見かけにおいてである。社会的実践として考えられ、生きられた都市的なものは、荒廃し、おそらくなくなりつ

＊　哲学者・都市社会学者
＊＊ 南山大学

つある。

そこでは、社会関係の特殊な弁証法的過程が生じている。それが第二の逆説である。すなわち、中心と周辺が互いを前提とし、対立する。この現象は、遠い昔に起源があり、よく知られた歴史的先例を有するのだが、今ではますます顕著なものとなり、南北問題の例のように、地球全体に拡大するまでに至る。そこから決定的な問いが、都市的なものをめぐる問いを超えるような問いが生まれる。問題は、このように全世界に現れ、都市に課される新たな形式なのであろうか。それとも、反対に、問題は、少しずつ世界のスケールに広がるような都市のモデルなのであろうか。第三の仮説によれば、現在の移行期において、私たちは数々の変動に立ち会っている。この移行期には、都市的なものと世界的なものが相互に混じり合い、混乱をもたらすのである。

批判的な総括を続けよう。19世紀末頃に、都市は科学的認識の対象となり始めた。都市社会学は、科学的な学問領域として、ドイツで、とりわけマックス・ヴェーバーによって開始されることになる。しかし、こうした都市の学問は、その約束を果たさなかった。都市科学は、今日では「都市計画」と呼ばれるものを生み出した。それは建築的創造のためのきわめて拘束的な諸規則と、当局者や管理者のための非常に曖昧な情報に要約される。いくつかの賞賛に値する成果にもかかわらず、都市計画は、都市思想の地位に登りつめることはなかった。同様に、都市計画は少しずつ矮小化され、テクノクラートのための一種の教理問答にまでなり下がったのである。

なぜ、そして、いかに、多くの研究や展望が、はつらつとして居心地の良い都市の実現に至らなかったのだろうか。資本主義と収益性や社会管理の基準を責めることは簡単である。こうした対応は、社会主義世界が同様の問題をめぐって同じ困難や同じ失敗に直面しているだけにいっそう不十分であるように思われる。それゆえ、西洋の思考法を問いかけ、問題にすべきではないだろうか。幾世紀が過ぎ去っても、わたしたちにおいて、思想はいまだに農民を出自とする。思想はまだ完全には都市生活者のものにはなっておらず、都市的なもののきわめて道具主義的な考えしか産み出せていない。この考えはギリシャの時代から支配し、ギリシャ人の思想を基礎づけた。彼らにとって、都市は政治と軍隊を組織するための道具である。中世では、都市は宗教的な枠組みである。つづく産業ブルジョワジーの誕生とともに、都市は労働力の再生産というステータスに至る。これまで、ただ詩人のみが〈人間〉のすみかとしての都市を理解した。こうして、驚くべき事実が説明されうる。その事実とは、社会主義世界が、都市問題の広大さや、新しい社会を建設するにあたって決定的である都市の性格をゆっくりと遅ればせにしか自覚できなかったということである。それがまた別の逆説を作り出す。

この間、深刻な脅威が都市一般とそれぞれ個々の都市に重くのしかかる。この脅威は日々高まっている。都市は、テクノクラシーと官僚制の二重の従属のもとに、要するに諸制度に従属する。ところで、制度的なものは、都市生活の敵である。なぜならば、その生成を不活発なものにするからである。新しい都市は、あまりにもはっきりとテクノクラシーの痕跡をとどめている。それは、建築上の革新であれ、情報であれ、文化的運営や団体生活であれ、こうしたあらゆる指導的な試みの無力を示す消しがたい痕跡である。各人が確認できるように、市町村庁は国家をモデルとして組織される。それは、国家の高級官僚による管理と支配の慣習を縮小再生産するものである。都市生活者は、自らの理論上の市民権とそれを十全に行使する可能性が狭められていくのを目の当たりにする。決定と決定を担う権力について多くのことが語られるのに対して、実際にはそうした権力は、当局者の手中にありつづけている。

新たな脅威として都市的なものの地球化が存在する。何もこの運動を制御しないのであれば、都市的なものは三千年紀のあいだに空間全体に拡大することになるだろう。この世界的拡大は、空間の均質化と多様性の消失という巨大な危険なしには進展しない。ところで、均質化は分断を伴う。空間は、売買される諸断片に分割される。その価格は階層によって決められる。こうして、社会空間は、均質なものになりながらも、労働、余暇、物質的生産、多様なサーヴィスといった空間に分断されるのである。このように分化していくなかで、新たな逆説が現れる。社会階級は、空間のうちに書き込まれることで階層化される。しかも、その傾向は絶えず増大しているのであって、しばしば主張されるように、低下しているというわけではない。いずれ、地球の表面には、農業生産に従事する島々とコンクリートの砂漠しかもはや残らないようになる。それゆえ、環境問題の重要性が浮かび上がるのである。つまり生活の枠組みと環境の質が、緊急性を帯びた政治的な問題構成として扱われると主張することは正しいのだ。このような分析が受け入れられるやいなや、展望と行為は、根底的に修正される。団体生活や自主管理のような、よく知られてはいるが、いくぶんかなおざり

にされてきた形態によって卓越した場を修復しなければならない。なぜならば、そうした形態は、都市的なものに適用されればただちに新たな内容を獲得するからである。したがって、問題は、社会運動や政治運動が、日常生活のあらゆる次元に関する一時的ではあるが具体的でもある諸問題をはっきりさせ、またそれらと再び連動することができるかどうかにある。

一見、日常性は非常に単純であるように思われる。日常性は繰り返しによって強く特徴づけられている。日常性の分析者は、やがてその複雑さや多様な次元を発見する。例えば、生理学的、生物学的、心理的、道徳的、社会的、美学的、性的次元などのように。どの次元もきっぱりとは定められず、それぞれの次元が多様な権利要求の対象になり得る。しかし、そうなるのは、日常生活によって、社会的実践の矛盾が最も経験される場が作り出される限りにおいてである。この矛盾そのものが、少しずつ発見されている。例えば、遊びと真面目さのあいだに、また使用と交換、貪欲さと無償性、ローカルな場と世界の場などのように。都市では、とりわけ今まさに触れた遊びと真面目さが対立したり、混ぜ合わさったりする。住まうこと、通りに出ること、伝達すること、そして話すことは、真剣であると同時に遊戯的なものである。

市民であることと都市住民であることが切り離された。市民であることはある領域に長く滞在することを意味していた。ところが、近代都市では、都市住民というのは絶えざる運動のただなかにいる。都市住民はそのなかを循環する。落ち着いたとしても、すぐにその場を離れるか、離れようとするのである。さらに現代の巨大都市においては、社会関係は国際的なものになる傾向がある。それは、移住の現象だけでなく、知のグローバル化を語らないとしても、とりわけコミュニケーションの技術的手段の多様化にも応じた傾向である。このような現状から出発して、市民権の枠組みを作り直すことが必要ではないだろうか。都市住民であることと市民であることを混同してはならないとしても、一致させなければならない。都市への権利は、まさしく市民権の革命的構想なのである。

訳注

訳注1　ギョーム・アポリネール、福永武彦他訳「愛されぬ男の歌」鈴木信太郎・渡邊一民編『アポリネール全集』紀伊国屋書店、1959年、231頁（訳文は原文を参照して改めた）。